

JAPAN ICOMOS INFORMATION

第3期 第6号 1996年10月30日 発行

日本イコモス 当面の課題

委員長・石井 昭

去る9月21日に開かれた本年第2回理事会の席上、日本イコモスの将来計画に関連して、当面する二つの課題を提起し、継続審議をお願いしました。

第1は「会員数・会員構成」に関する件です。日本イコモスは現在、名誉会員5名を含め全137名の個人会員から成り立っています。団体会員・賛助会員は残念ながら目下のところ皆無です。個人会員については、潜在的な入会希望者（被推薦予定者）が少ない模様なので、今後、その数が漸増することは確実で、喜ばしく思いますが、他面、わが組織の事務処理能力といった現実問題を考えると、会員数を無制限に増大させるわけにもゆかず、何らかの目標値が必要になります。また、ICOMOS傘下の専門分科委員会への積極的参加など、国際的活動の拡充を図るためには、会員の数だけでなく、その専門分布や職域分布についても現状を再検討し、然るべき方針を定めなければなりません。日本イコモスの「適正な規模」「妥当な構成」は奈辺にあるのでしょうか。

ICOMOS DIRECTORY 96によれば、本年1月、ICOMOSの全会員数は約5300名で、所属国数は86カ国とされています。単純平均で1国約62名ですから、日本の137名は多い部類に属します。国別の名簿をみると、フランス572名、アメリカ428名が突出して多く、カナダ262名、オーストラリア258名、イギリス248名、ベルギー208名などがこれに続いています。他方、会員数の極度に少ない国々もあり、アジア地域の場合、スリランカ17名、タイ13名、インド12名、パキスタン11名、北朝鮮9名、中国5名、フィリピン5名、インドネシア5名、台湾2名といった状況です。欧米の諸国では、概して会員数が多いうえ、その中に、正確には分かりませんが、かなりの数の賛助会員・団体会員（名簿上は1名として登録）が含まれており、このことが国内委員会の活力と財政安定に寄与しているものと思われま。

理事会で提起した第2の課題は「事務局」に関する件です。感謝の念を込めてここに明記しますが、現在、日本イコモスの事務局は庶務担当理事・渡辺保弘氏が主宰する（株）文化財工学研究所に無償で寄寓し、所員・我妻綾子女史に通信連絡、文書管理、金銭出納などのほとんど全部を依存しています。しかも、こうした態勢がすでに8年間も続きました。規約によれば、理事の任期は1期3年・連続3期をもって限度とすると定められていますので、渡辺氏の任期は来年（1997年）12月で満了します。そのあと、事務局は何処に置き、どのような態勢で運営したらよいのでしょうか。

目下のところ、上述2件の課題に対する解答は見出されておられません。理事会で今後とも検討を継続します。会員の皆様にも、建設的な提案がありましたら、ぜひお聞かせくださるようお願いいたします。

目次

1996年第2回理事会報告	渡辺保弘	2
研究会・中川 武「アンコール遺跡の保存修復・その理念と方法」	鈴木伸治	4
会員だより — イランとユネスコ、そして日本	岡田保良	9
事務局日誌	渡辺保弘	10
お知らせ		11

1996年第2回理事会報告

去る9月21日(土)10時30分から12時30分までの2時間、東京神田の学士会館本館において、本年次第2回理事会が開催された。出席者は、顧問・伊藤延男、監事・木原啓吉、委員長・石井 昭、理事・上野邦一、陣内秀信、羽生修二、益田兼房、安原啓示、渡辺勝彦、渡辺保弘の10氏および陪席我妻綾子(事務局)で計11名。報告および審議された事項は以下の通りである。

1. 第11回イコモス・ソフィア総会に関連して

- (1) 総会に上程される二つの DOCTORINAL TEXT について
 - a. 記録作成諸原則 (PRINCIPLES FOR THE RECORDING OF MONUMENTS, GROUPS OF BUILDINGS AND SITES - 記念建造物・建造物群・史跡に関する記録作成のための諸原則)
 - b. 水中文化遺産憲章 (THE ICOMOS CHARTER FOR THE PROTECTION AND MANAGEMENT OF THE UNDERWATER CULTURAL HERITAGE - 水中文化遺産の保護と管理のための ICOMOS 憲章)

上記二つの公式宣言文書についてはすでに [INFORMATION 3-4, 3-5] を通して経過報告および草案説明がなされ、意見提出が呼びかけられたが、今回の理事会までに会員各位から特別のご意見がなかった旨、石井委員長から紹介された。理事会としては、日本イコモス国内委員会は「原案に賛成」との方針でソフィア総会に臨むことが決議された。

- (2) イコモス役員改選について
イコモス本部発行の [NEWS FLASH] (JULY, 1996) に掲載の立候補者のリストに基づいて、石井委員長から次のように説明があった。今回の選挙では、President, Secretary General, Treasurer General についてはそれぞれ現職者1名のみが立候補しているので無競争となり、Vice President は定員5名のところ8名、Executive Committee へは定員12名のところ16名がそれぞれ立候補している(日本からは西村幸夫氏が Executive Committee に立候補)。なお、US/ICOMOS・FRANCE/ICOMOS・ZIMBABWE/ICOMOS よりは、それぞれの国内委員長が Vice President に立候補したため、その support を依頼したい旨の文書が委員長宛てに届いている。役員を選出にあたっては、地域的なバランスなどにも配慮する必要があるため、日本代表団は現地で協議を行うことになる。なお、1国内委員会あたり18票の投票権が与えられているが、日本からは10名の出席が予定されるため、8名分の委任状が提出してある。
- (3) シンポジウムについて
日本からは5名の発表が予定され、西村幸夫氏は第3セッションの総括報告者をつとめる。また総会時に開催される POSTER EXHIBITION "MESSAGE" への対応としては、羽生修二・福川裕一の両氏が中心となり "HOI AN Conservation Team of Japan" の名でヴェトナム・ホイアンの町並み修復に関するポスター12枚を大会本部に送付した。

2. TWENTY BOOKS PLAN への対応について

前号の [INFORMATION] の記述に沿って、"Conservation of Monuments and Sites in Japan" の内容と編集経過が委員長から報告された。20の国々とは、a) Africa (2国) Zimbabwe/Egypt B) America (5国) - Jamaica/Bolivia/Canada/Dominican Republic /Cuba c) Asia and Oseania (8国) - Japan/Sri Lanka/China/Thailand/Pakistan/India/Australia/Israel d) Europe (5国) - Bulgaria/Hungary/Russia/Checo Republic

/Cyprus で、各国がそれぞれ一冊を担当した。完成した書物はソフィア総会席上で有料配布の予定となっている。理事会の協議の結果は次の通り。①20ヵ国につき各一冊を事務局蔵書として購入する。②日本国内の購入希望者には入手方法につき便宜を計る。

3. 日本イコモスの財政状況について

羽生修二・会計担当理事より、中間会計報告を基に次のような説明があり、財政の窮状が訴えられた。①基金の利息が数年前と比較して10分の1以下になり、会員の渡航費援助も満足にできない。②本部へ納入する会員費、[INFORMATION]等の出版および郵送費、事務費を除くと、他の活動に充てられる金額は年間20万円にも満たない。③本年は TWENTY Books PLANに40数万円の特別支出を余儀なくされた。今後何等かの収入の道を考える必要があり、会費滞納者への対応とあわせて対策を立てなければならない。

理事会では、その対策について次回理事会・総会に向けて引続き検討することになった。

4. 日本イコモスの将来計画について

会員数・会員構成の問題と事務局の問題が取り上げられた。ことに事務局については、現在渡辺保弘理事が全面的に引き受けているが、来年、理事連続3期の最後の年となるため、任期中にこの問題を解決すべく、真剣に考えていかなければならない、との石井委員長からの提案があった。これらの問題については会員担当理事（田中琢・近藤公夫・渡辺勝彦の3氏）に次回理事会・総会にむけて検討願うことになった。

5. 国際専門分科委員会への参加について

イコモスの専門分科委員会（以下委員会）への積極的な参加が望まれることは、今までに[INFORMATION]を通して石井委員長がくりかえし呼び掛けてこられた。間もなく正式に発足する第16番目の委員会（Analysis and Restoration of Structures of Architectural Heritage）からは、ソフィア総会に先立って開催する設立会議に voting member を出してほしい旨の要請があったので、委員長から、現在トルコに出張中の日高健一郎氏に出席を依頼したが、公務の都合で参加できないとの回答があった。この件に関する今後の措置はソフィアにおいて委員長が判断することになった。

6. 広報 - [INFORMATION] について

ここ1~2年多少の進歩があったと思われるので、さらなる前進を期待したい、との石井委員長のコメントがあった。今後の予定について協議した結果、10月に第2回理事会と研究会の報告を主にたものを発行し、そのあと改めてソフィア総会の特集号を発行することになった。

7. 当面の日程について

- a. 研究会：益田兼房・事業担当理事より、第3回研究会として、日本建築学会歴史意匠委員会との共催で「海外における文化遺産の調査と保存に関する円卓会議」（仮称）を11月9日（土）に開催すべく計画中である、との報告があった。
- b. 第3回理事会および1996年次総会：12月14日（土）の午前中に理事会を開き、午後、総会を開催することとした。会場はいずれも学士会館本館である。

（文責・渡辺保弘）

本年第2回の研究会は9月21日(土)午後、学士会館に於いて開催されました。概要は下記の通りです。

- ・テーマ：「アンコール遺跡の保存修復、その理念と方法」
- ・講師：中川 武氏 早稲田大学教授

アンコール遺跡保存修復工事・日本政府代表専門委員

<講演概要>

1. JSAアンコール遺跡保存修復プロジェクトの経緯

外務省文化交流部より1994年までに計4回の予備調査団が派遣され、各方面の専門家とともに、カンボジア政府との協議や専門的調査を行った後、4年間の具体的な修復協力計画を作成した。これに基づきJSA (Japanese Government Team Safeguarding Angkor) が結成され、現在までに延べ約200人の専門家の参加によるJSA調査団の派遣、5人の日本人長期派遣専門家、約100人のカンボジア人スタッフにより、遺跡修復に関する調査研究、修復工事等の活動が運営されている。

現在、JSAの保存修復プロジェクトでは①バイヨン北経蔵の解体修理およびバイヨン寺院全体の保存修復のためのマスタープランの作成、②アンコール・トム王宮前広場のプラサート・スープラとそのテラス、③アンコール・ワット外周壁内北経蔵、の3つを扱っており、これに連動する形で調査研究、人材育成等の活動を行っている。(図1参照)

2. JSA保存修復プロジェクト

①バイヨン北経蔵の解体修理およびバイヨン寺院全体の保存修復のためのマスタープランの作成

バイヨン寺院はアンコール遺跡の中でも最も危険な状態にある遺跡であり、特に北経蔵は昨年6月には北経蔵の壁体の一部が動き出すなど、全壊の一步手前という状態であった。(図2参照)倒壊を防ぐため、昨年9月より解体のための準備工事を開始し、今年3月までに上部構造の解体を終了、97年11月からは基壇部の解体を予定している。しかし、解体された部材の劣化は予想以上であり、現在、今までの調査研究の成果をもとに、再構築に向けて各部材の修復を行っている。また、一連の作業を通して、基壇内部の構造、倒壊の原因となった床面の沈下の状態等が明らかにされつつある。今後はこれらの調査によって得られたデータをもとにして、これらの現象をいかに解釈し、基壇部の補強方針を決定するかが、大きな課題である。

また、もう一つの課題は、屋蓋部の復元再構築をどのように行うかという問題である。屋蓋部についてはEFEO(フランス極東学院)によって倒壊を避けるため解体措置がとられてきたが、どこの部材をどこに置いたかという記録が殆ど無く、部材の同定作業は困難を極めている。このような状態でどのように屋蓋部を扱うかという問題は大きく、オリジナルの部材が同定できなければアナスティロシスによる修復も不可能である。また、例えすべての部材が揃ったとしても、何らかの補強が無ければ、将来の倒壊を避けることはできない。(図3参照)

以上の問題点を考慮した上で、北経蔵の解体修理の方針を決めていきたい。極力、オリジナルに近い形で、かつ、カンボジア側のメンテナンスの体制等を考慮しながら、最善の策を選択していきたい。

北経蔵の解体修理と並行して、バイヨン寺院保存修復のためのマスタープランの作成への作業も行われている。現状として、バイヨンの主塔部分は、戦後にEFEOによって、モルタルの注入といった構造補強がなされているが、部分的に部材が動き始めている。また、この建築史上において極めて独創的で複雑な構造を有する遺跡の修復計画を立てるためには、この遺跡がどのように成立していったかを知ることが不可欠である。フランス極東学院のデュマルセ氏による、バイヨンには大きく4回の増築がなされたという仮説が有名であるが、しかし、この説とバイヨン寺院の総合的調査によって導き出されたものではない。そのためにも、バイヨン寺院の全容を正確に把握することが重要であり、バイヨン研究も現在行っている。また、北経蔵の修復工事で得られた経験を、バイヨン寺院の将来の修復の手がかりとしたいと考えている。

②アンコール・トム王宮前広場のプラサート・スープラとそのテラス

アンコールトムの王宮前広場は東南アジアには希な堂々たる規模を持った広場であり、将来的にはこの広場の活用が可能になるような整備を行っていきたい。プラサート・スープラは広場の東側に位置する12の塔から成る遺跡群であり、塔前室の改築に伴いテラスも拡張され、その形態を変化させながら現在の状

態に至ったことなどが、これまでの発掘調査を通して、確認された。これにより、従来のEFEOの考えていたテラスの形態と大きく異なることが証明され、前身の遺構が第一次アンコール時代のものである可能性も出てきた。

加えて、プラサート・スーブラ周辺の地質調査では、地下約5mまでの表層地盤の強度特性が季節により変動していること、水位の変動により構造物に変位が生じ、これが遺跡に大きな影響を与えていることが解明された。

しかしながら、ラテライトの風化は激しく、オリジナルの部材を用いた解体再構築にはおそらく耐えられないであろうと思われ、地下水位の安定化を含めて今後の修復方針を慎重に検討しなければならないと考えている。

③アンコール・ワット外周壁内北経蔵

アンコール・ワットは、アンコール遺跡を中心としたクメール建築様式の集大成であるが、中央塔基壇や外回廊庇繋ぎ梁など、近い将来根本的修理が必要となるだろう。北経蔵に関しては四方向のポーチ部分の屋根が崩落しており、徐々に劣化が進行しているものの、比較的地盤が安定していることもあり、他の2つのように危機的状態にあるとは考えていない。

この北経蔵の修復については、一部解体を伴う修復過程を公開することによって、技術的問題を国際的に討議できるような、将来の国際的取組が必要となるアンコール・ワット修復のためのオープンサイトとして位置づけていきたい。

3. 調査研究

JSAがこれまで取り組んできた調査研究では、先に述べた考古、建築の分野のみならず、地質学、岩石学、保存化学など、数多くの分野での成果があがりつつある。特に岩石学では、各遺構を構成する砂岩に関して分析を行い、石材供給地の違いと建造年代による遺構のグループ分けに成功した。また、砂岩の層理面方向の調査から、古い遺構では層理面が縦になっている石材の割合が大きくなっていることが明らかになった。これはクメール建築の石造技術の成立を考える上で非常に重要であると考えられる。

4. データの公開とオープンなディジション・メイキング・システム

日本の文化財建造物の修復については、その技術レベルの高さのみならず、記録の仕方についても、高いレベルにあるのではないかと思う。アンコールの場合、EFEOの蓄積というのは膨大であるが、時として、想定復原を行ったような記録が残されており、昔はどうであったのか？ということを確認できない場合がある。

JSAのプロジェクトにおいては、高い技術レベルの修復を目指すだけでなく、現状や、修復工事、調査研究の成果を正確に記録し、それを報告書という形で公開してゆくべきであると考えている。報告書に関しては1995年から本格的に出版をはじめたが、幸い、ユネスコやカンボジア政府から高い評価を受けており、今後は、公開したデータをもとに各国の専門家と討議を重ねて、公開の場で修復理念や修復方法について討議していきたい。

日本においても、保存修復方針の決定過程に、市民の意志を如何に反映させるかというのが、文化財建造物の保存修復の今後の課題として取り上げられている。カンボジアにおいては、いまだ市民の意志を反映させるという状況ではない。しかし、8月のバイヨン・コロキアムで各国の専門家とバイヨンの修復方法を討議したように、できるだけオープンなディジション・メイキングのシステムを作ってゆきたいと考えているし、この方針は、ある程度支持されているのではないかと思う。

5. 人材育成

プノンペン王立芸術大学の建築と考古の学生に毎回調査に参加してもらい、共同調査、共同生活を通して、現場研修と講義を行っている。さらに、現地カンボジア人スタッフに対しても各人の適性を見出しながら得意分野に対する継続的訓練を行っている。ワーカーの中には発掘作業に秀で、平板を使っての測量等の技術も習得した者もあり、現在ではカンボジア人スタッフだけで一つのトレンチの発掘を任せられることも可能となった。これらの成果は、我々の成果と言うより、カンボジアの人々の学ぶ意欲によるところが大きい。法隆寺の大修理が数多くの優秀な修復技術者を産み出したように、近い将来、カンボジアの人々がアンコール遺跡保存に主導的役割を果たすことができるよう、今後も人材の育成に力を入れていきたい。



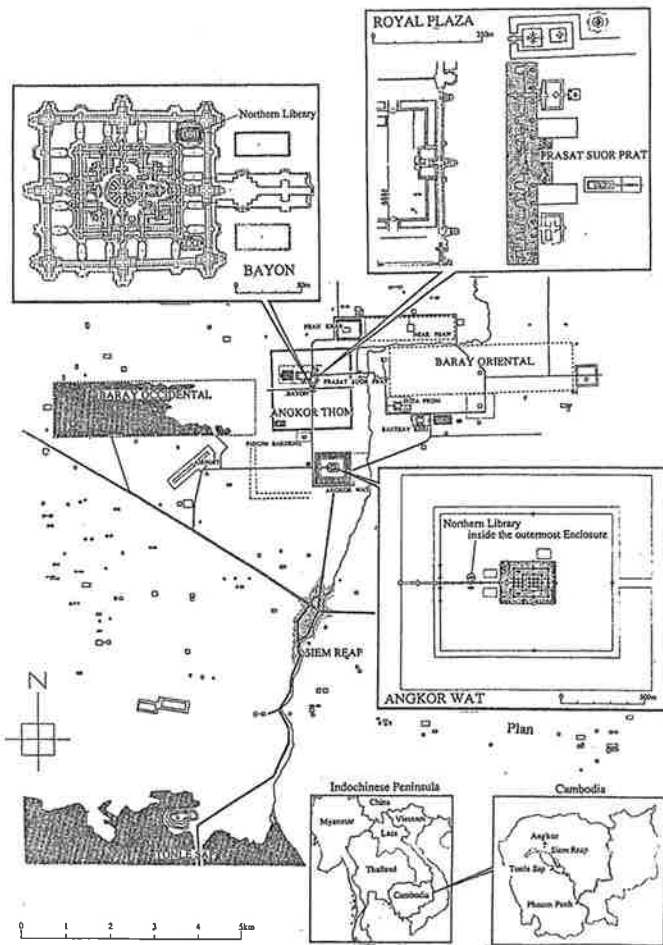


図1-JSAプロジェクト位置図

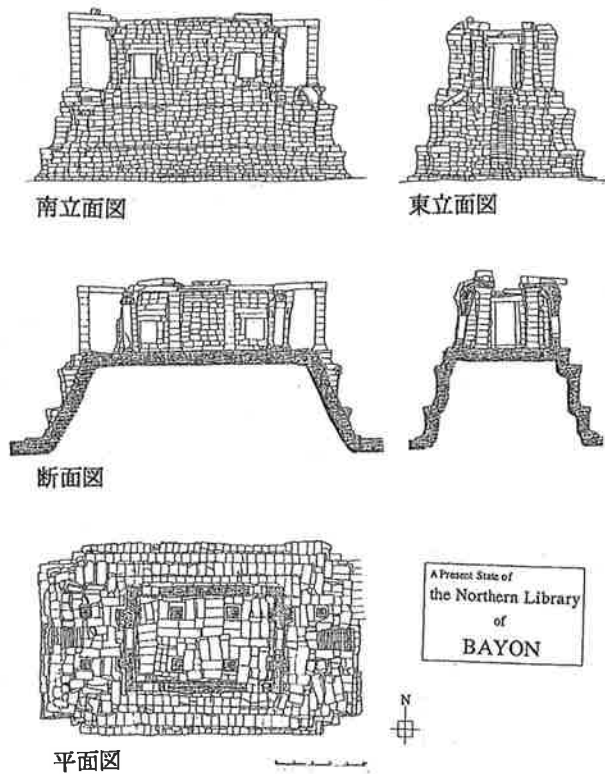


図2-バイヨン北経蔵現況図

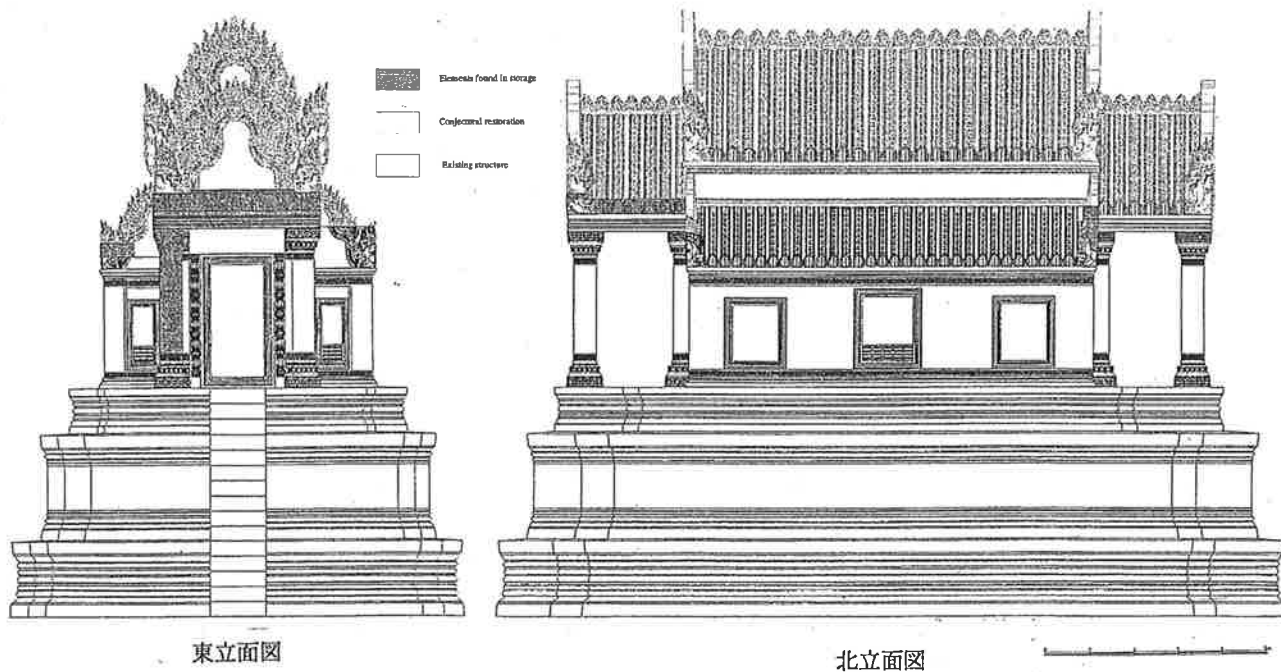


図3-バイヨン北経蔵復元図

(灰色部分：新たに発見された部材 点線部分：復元 実線部分：現存部分)

<質疑応答>

- 問；プラサートスーブラ、バイヨン北経蔵修復、また、バイヨン全体の修復方針については、現時点でどの様に考えているのか？特に基礎部分の補強についてはどういう方針で行おうとしているのか。
- 答；バイヨンの基礎部分についてはオリジナルの構法で可能であろう。ただし、ラテライトを砂岩に替えたりコーナー止めをしたりするのは、改変ではなく改良としての位置づけができると考えている。一方でラテライトの劣化の激しいプラサートスーブラの場合は大胆な修復を行う必要がある。
- 問；バイヨン北経蔵の修復方針のなかで、屋蓋部の消失した部材はどの様に扱うのか。
- 答；消失した部材に関しては、我々もタイムリミットがあるので、見つけることができなかつた場合、その時点で見つかっているもので組み上げ可能であれば、復元したい。組み上がらなければ推定でやることはしないつもりで、発見された部材の保存という形にする。また、うまく繋がって組み上がる部分があれば、部分的に再構築することも現時点では考えている。
- 問；EFEOが行った瀨王のテラスの修復のように、基礎の部分をコンクリートで補強するようなことはよくないことだと考えているのか？
- 答；文化財の価値というのは、まずオーセンティシティが大事で、オリジナルなものを如何に守るかというのが基本的には大事であると考えている。しかし、それは相対的な問題で、それを守って全体的な価値が失われるようでは意味がなく、バランスが重要である。修復の理念としては価値とは何かということをよく考えなくてはならず、建築史的な価値か、カンボジアの人にとっての価値か、地元の人にとっての心理的、精神的な価値か、これらの総合的判断になると考えている。ただ、世界遺産という位置づけから考えると、地元の人達の意見だけで、決められるべきものではなく、建築とか技術的価値とかを含めて総合的判断を下さなければならない。日本でも今回の地震で問題になったように、文化財修復保存は教条的になってはならない、柔軟性がなければならないという議論があるが、カンボジアにおいても同様であろう。ただ、EFEOのやり方に関しては、地元の人達に受けが悪く、これも無視することはできないと考えている。
- 問；バイヨン北経蔵、バイヨン外回廊部分では屋根の崩落が激しいようであるが、バス・レリーフ保存のための仮設的な雨よけは考えているのか？
- 答；これはバイヨン全体の景観の問題でもあり、仮設的な屋根についても同時に幾つか絵を描きながら検討している。バイヨンの外回廊は、殆ど屋根が落ちていて、これは不等沈下で落ちたものではなく、もともと構造上の問題があって落ちたものであり、復元するとなると非常に困難を伴うと予想される。この問題は非常に重要であり、大々的なディスカッションを行ってその中で決めていくことになるであろう。
- 問；カンボジアにおいて確かにフランスの蓄積は大きいですが、彼等がやっていない部分も多く、特に技術的な問題があまり研究されていない。その意味で今回のJSAのプロジェクトのように非常に丁寧に解体して、丁寧に記録している点は、大きな意義があると思われる。従来フランスが蓄積できていなかったところを逆に蓄積するという意識しているのか？
- 答；JSAとしても、そこを狙っている。技術的な問題だけではなく、例えば、バイヨンの顔は何であるかという問題は、観音だと言われているものの、実証的な調査研究はなされていない。我々は、現在、一つ一つ足場を組んで正面から写真を撮って、美術史の人が一つ一つ、例えば顔がどうであるとか目がどうであるとかインベントリーを作っている。今までは、半眼の顔と怒っている顔があると言われていたのが、実際は仕上げの途中だったと判明したりする。そういった一つ一つの精緻な観察の記録に基づいて考えようということをバイヨンマスタープランの一部としてやっている。そういうことを積み重ねていけば、フランスの蓄積できていない部分を蓄積できるのではないかと考えている。
- 問；カンボジアでは内戦時代から、ユネスコが関与する形で修復を行おうということになったため、世界遺産の登録手続の条件として重要な問題である今後の周辺の開発をコントロールするゾーニングができていないが、現在の状況はどうか？
- 答；ZEMP Team (ZEMP=Zoning and Environmental Management Plan for Angkor: ユネスコが組織する専門家集団) が中心となって提案されたマスタープランは内容があまりなく、ホテルゾーンや開発を



禁止するゾーンなどを決めているにも関わらず、政府の中に開発許可を与える人と与えない人がいて大変もめている。国際調整会議などでは、フランスは強硬路線で「そんなところにホテルをつくるなら引き上げる」といった感じだが、日本は割合カンボジア寄り、相手を理解しながらよりよい方向に持っていこうと努力している。私の印象では、この日仏の協力が、割合うまくいっているように思う。

問；フィリピンのイントラムロスなどでは、イントラムロス管理局が事業を行い、その収入を文化財修復に回すことで自活できるシステムができ上がっているが、アンコールではどうか？

答；アンコールの場合、入場料を20ドル徴収して、ある程度メンテナンスをやろう、ということになっている。年間4万人以上の外国人旅行者がいて、莫大な収入があるはずだが、実際には修復、調査などには回されていない。ただし、将来的には、改善されていくとは思っている。

問；日本の海外調査は体制が変わると資金が打ち切られることがあり、問題であるといえるが、その点についてはどの様に考えているのか？

答；途中で計画年度が終了したからといって打ち切られたりすると、若手研究者も育たず、国際的にも修復事業において信用を失ってしまう。日本として文化的援助をするなら、継続的に長くできる体制を作る必要がある。日本の場合、若手研究者の本腰を入れて打ち込もうとする気持ちに歯止めがかかっているのは、いつ終わるかの見通しが無い為であろう。そのため、今までの日本の修復事業あるいは調査研究は、ある程度でき上がった人が中心となる形になってしまう。日本においてもEFEOのような国立の組織、拠点となる施設が必要であるが、現行の制度の中ではODA等と結びつけない限り、実現は難しい。

問；長期的に調査修復に耐えるような資金確保についての見通しはあるのか？また、援助の形態としてはどの様になっているのか？

答；ユネスコ信託基金のプロジェクトとして4年間の予算はついている。基本的にはマルチラテラルな援助であり、カンボジアと日本を直接的に結ぶような援助の資金源については文化無償援助、国際交流基金による長期専門家派遣等がオプション的には存在している。長期的な展望については、アンコール保存国際調整委員会というのは日本が初めてヘゲモニーをとって始めたもので、毎回の国際調整会議でも東京宣言は重要視されている。それだけカンボジアも日本を頼りにしていることもあり、今のようなペースで出続けるかどうかは別にして、何らかの形で継続されるだろう。バイヨンマスタープランにしても、うまくいっても20年はかかると考えられ、体制づくりの面では、長年活動しているEFEOのやり方に学ぶべき点も多いと考えている。

(文責 東京大学都市工学科・鈴木伸治)

イランとユネスコ、そして日本

国士舘大学イラク古代文化研究所
岡田 保良

所属先の名の通り、私の本来のフィールドはイラクにあります。ところが1990年夏の「湾岸危機」以来、調査資金の頼みの綱だった科研費が、採択されても交付されないという事態がいまだに続いていて、サダム氏によほどの豹変がないかぎりこの国での調査は望めそうにありません。そんな状況も、私にとっては必ずしも災いとばかり言えない面があります。この間自身の視野を広げる機会にどれだけ恵まれたことか。イラク以外のフィールドを私と結びつけてくれた先学、朋友の方々、そしてそれを許容してくれた自身の職場に感謝。イランと私の関係もその類で、かつてイラクでキャンプを共にした友人O氏の紹介がきっかけでした。

1979年のイスラーム革命まで、イラン各地の遺跡には、日本を含む多くの外国調査団が闊歩していました。とくにスーサという廣大無比の遺跡を拠点とするフランス人の活躍は他に比べて一歩抜きん出ていました。スーサはペルシア湾頭にひろがるフゼスターン平原をおさえ、バビロニアと対峙しつつ栄えたエラム王国の都であり、ダレイオスがペルセポリスに先んじて築いた王宮の跡としても知られています。今世紀はじめフランス隊はこの遺跡の丘の上に、十字軍さながらの城を、それも遺跡由来の夥しい数の焼き煉瓦を積み上げて堂々と構築し、宿舎としていました。

1935年、彼らのもとに新たな大遺跡発見の報がもたらされます。崩れた市壁が土塁状に延々とめぐり、イランにはそれまで知られていなかったバビロニアさながらのジグurat（聖塔）の遺構が中央に高々とそびえるその遺跡は、バケツを伏せたような外観からチョガ・ザンビールという名で呼ばれていました。スーサから南へ車で1時間足らずの距離にあります。第二次大戦後、フランス隊を率いたR. ギルシュマンはこの遺跡の本格的な発掘に乗り出します。10年余かけて主要部分を掘り上げ、前13世紀代にエラム王国の宗教上の都だったことがわかりました。その成果はすでに4分冊の報告書として公刊され、1979年、はやばやとペルセポリスとともに世界遺産に登録されています。イスラーム革命後、各国隊につづいてフランス隊も85年には完全に撤退し、宿舎の城はイラン政府の手に移されたと聞きました。

それからさらに10年後、車庫にギルシュマンの四駆車を朽ちたまま残して内装を新たにしたその城は、私たちユネスコ調査団の宿となったのです。ユネスコ文化遺産局と日本政府（実際には外務省文化一課）はイランからの要請を入れて、チョガ・ザンビール遺跡の保存プロジェクトを日本信託基金による事業とするべく事前の調査団を派遣することとなり、95年2月に第1次、11月に第2次のミッションが組まれました。20日間足らずの第2次ミッションにはユネスコ担当官M氏と私のほか、日本からはこの事業の仕掛人と言うべきイラン考古学のY氏と、東京国立文化財研究所に推薦していただいた地盤水理工学専門のW氏が、さらにM氏の要請でグルノーブル建築学院のフランス人教授G氏がコンサルタントとして加わりました。ジグurat以外にも、ヴォールト構造の地下式王墓など保護措置が必要な貴重な構造物をみとめ、現地においてイラン文化遺産庁の担当者たちと具体的な事業予算を積み上げたのです。そこまでは順調で、事業はすぐにでも着手できそうな進捗状況でした。ところがその後、日本側とユネスコ側の見解の食い違いを調整したり、事業を受け入れるイラン側の手続きに時間がかかったり、この10月初旬現在、立ち上がりまでいま一息というところでしょうか。西側諸国とは決して良好とはいえない状況下、イランでは革命後をはじめといえる文化遺産をめぐるこの国際協力事業は、単なる文化事業以上の意味もあるようです。

イランとの関係を契機に、ユネスコ日本信託基金やそれに類する保存プロジェクトにかかわっている人たちの経験談を耳にするにつけ、みなが一堂に会するような場を設けられないか、漠然と考えるようになりました。そんな思いをこのイコモス国内委員会の方々にもぶつけてみたところ、ことは一気に実現の方向へ走り出したのです。「海外における文化遺産の調査と保存に関する円卓会議」と称するその集まりは、来る11月9日、三田の建築会館で開かれる運びです。現在関係する人たちがお互いに情報を交換するだけにとどまらず、それを次の世代の人たちにが大いに生かせるような集まりになれば、と願っています。（了）



事務局日誌

(1996/8/10-1996/10/29)

1996年

- 8/12 [JAPAN ICOMOS INFORMATION 3-5]発行 会員各位に送付
- 8/12 US/ICOMOS より、第11回イコモス・ソフィア総会における役員改選で、同国内委員会より Ann Webster Smith氏がVice Presidentに立候補するので supportをお願いしたい、との手紙を受領
- 8/14 コロンボのシルヴァ氏より、8/13に 20 BOOKS の原稿を確かに受領した、との石井委員長宛のFAX受信
- 8/18 国際地域開発センターより、「国家級歴史文化名城としての中国・鎮江市における歴史的環境保全行政に関する研究」(報告書)受領
- 8/26 カナダのモントリオールに事務局を置くイコモス専門分科会 ICAHM (Archaeological Management) より、1994/10/11-15 に同地で開催された第2回の会議の報告書(417ページ)を受領。なお、送り状として、Scientific Coordinator の Claire Mousseau 氏およびモントリオール市長Pierre Bourque 氏からの手紙が添付されていた
- 8/28 フランス・イコモスより、Vice Presidentに立候補した Christian Schmukle Mollavd 氏の supportをよろしく頼む、との手紙を受領
- 8/28 社団法人・日本ユネスコ協会連盟事務局より、荒井千香子・横手直子の両氏が来局。最新版の世界遺産マップおよび配布用パンフレット各10部が国内委員会に寄贈された
- 8/28 9月21日(土)に開催される本年第2回の研究会「アンコール遺跡の保存と修復、その理念と方法 講師・中川 武氏」の案内を会員各位に送付
- 8/30 パリ本部より、イコモス専門分科会 "Analysis and Restoration of Structure" のVoting Member を、ソフィア総会に先立って開催される会議に送ってほしい、とのFAX受信
- 9/4 パリ本部に、当国内委員会よりの総会出席予定者(10名)のリストおよび委任状8票をFAXにて送信。同日書留で送付
- 9/6 ジンバブエのイコモスより、同国内委員会会長の Dawson Munjeri 氏が Vice President に立候補した旨の挨拶状および、同氏がExecutive Director であるジンバブエ美術館の Annual Report (July 1994-June 1995)を受領
- 9/9 パリ本部より第11回ソフィア総会のプログラム (final version)受領
- 9/11 9/9 に送付されたソフィア総会のプログラムを、総会出席予定者に送付
- 9/18 "World Monuments Watch" より1996年度のFund支給が決定された 100の世界遺産に登録されている遺跡、建造物等のリストおよび1997年度の援助申込書等受領
- 9/21 日本イコモス国内委員会本年第2回理事会開催(於学士会館 10:30-12:30)
- 9/21 1996年第2回研究会開催(於学士会館 1:00-3:30p.m.)
- 9/25 ユネスコ(パリ)より The World Heritage News No.11 June 1996受領
- 9/27 セネガル・イコモスより、Vice President に立候補した Mamadou Berthe 氏の support 依頼の手紙受領
- 10/2-4イコモス・ソフィア総会に先立って開催されたビューロー会議に伊藤延男イコモス副会長が、諮問委員会に石井 昭委員長がそれぞれ出席された
- 10/5-9イコモス第11回総会(於:ブルガリア・ソフィア)に上記2氏をはじめ、坪井清足、大河直躬、足達富士夫、片方信也、西村幸夫、西浦正輝、森下 満の諸氏計9名が参加された
- 10/9 カナダ・イコモスより、Bulletin [Momentum 1996]Vol.5, No.2, 1996 受領
- 10/15 東京芸大の斎藤英俊氏より、1997年 1/19-25日に開催される国際シンポジウム「災害から文化財を守る-緊急時の対策と活動の指針」(東京芸大主催)の関係資料およびICOMOS本部による後援依頼の件についての文書受領



お知らせ

1. 1996年次第3回研究会について
理事会報告 7.aにありますように、本年第3回の研究会を、日本建築学会歴史意匠委員会との共催により、「海外における文化遺産の調査と保存に関する円卓会議」と題して、来る11月9日(土)午後、日本建築会館で開催いたします。会議の内容につきましては、後日ご報告いたします。
2. 1996年次総会について
9月21日に開催された理事会に於て、本年次日本イコモス国内委員会の総会は、12月14日(土)午後1時～4時と決定いたしました。まだ少し先のことですし、改めて各位にご通知いたしますが、今からご予約ください。お一人でも多くの会員の皆様の出席が望まれます。なお、同日午前中に本年次第3回の理事会を開催いたしますので、顧問・監事・理事各位はよろしくご願ひいたします。
3. 会費納入のお願い
毎回のお願いとなりますが、本年及び他年次の会費未納の方は、お手数ですが同封の振り込み用紙にて速やかに納入して下さるようお願いいたします。なお、当方での会費の受領記録には慎重を期しているつもりですが、ご不審の点等ありましたら、事務局までご連絡くださるようお願いいたします。

[JAPAN ICOMOS INFORMATION]

第3期 第6号

1996年10月30日発行

日本イコモス国内委員会 委員長 石井 昭

編集責任者 陣内秀信・宗田好史

事務局 渡辺保弘・我妻綾子

連絡先：〒169 東京都新宿区大久保3-9-5-113 (株)文化財工学研究所気付

電話 03-3200-9355 FAX 03-3200-9423